

東京YMCA

2023

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

災害復興支援活動とネットワーク

～関東大震災の支援活動より～

2023年9月1日は、関東大震災から100年目にあたります。過去のさまざまな資料に目を通していくと、そのときYMCAは、その強みであるネットワーク力をいかに発揮し、国内外の枠を超えて、大規模な支援活動を展開していたことが確認できました。100年を迎えるにあたり、このネットワーク力に注目して、関東大震災での支援活動を振り返ってみたいと思います。

（注：ローマ字での登記が認められる前のYMCAの正式名称は基督教青年会。文中には両方の表記があります。）

いち早く始動

近年は、各地域で防災訓練が行われ、各所に避難所も設けられ、大地震が起きた際には何をすべきかを人々は知っています。しかし当時は、一部の専門家を除いて、東京に巨大地震が起こることを誰も想像していませんでした。ましてや発災後の火災など、誰が予想したでしょう。こうした状況の中で、東京YMCAは発災直後から支援活動を始動したと記録されています。この初動の速さには目を見張るものがあります。

組織的な支援活動

地震発生後、東京YMCAの職員は体育館内に罹災民を収容していましたが、その後の猛火により本館は全焼、体育館も焼けました。同様に被災した日本YMCA同盟が東京YMCAに避難し、両者は協働して支援活動

にあたります。

9月5日に「救護本部」が設けられ、救護本部委員長には東京YMCA理事長の長尾半平が就きました。救護本部には、総務部、天幕部、配給品部、宗教部、収容部、避難民の専門家を除いて、東京に巨大地震が起こることを誰も想像していませんでした。ましてや発災後の火災など、誰が予想したでしょう。こうした状況の中で、東京YMCAは発災直後から支援活動を始動したと記録されています。この初動の速さには目を見張るものがあります。

当時の東京YMCAは、神田の青年会館（本館）と新設された体育館・プールがメインですが、職員もわずか。どうやってこれだけの活動を組織的に行えたのか、不思議です。しかし、後の阪神淡路大震災以降の支

ということが想像できます。

YMCAの経験と団結力

YMCAの災害復興支援は、関東大震災が最初ではありません。もっとも古い記録は、1885年6月に起きた明治大洪水（大阪）での大阪YMCAの働きです。設立間もないにもかかわらず、災害の中心地に「治療施設」を開いたと記録さ

援活動の経験から考えると、職員以外の会員や関係者、さらには新たな支援者も現れ、支援の渦ができて行ったのだろうと

援活動の経験から考えると、職員以外の会員や関係者、さらには新たな支援者も現れ、支援の渦ができて行ったのだろうと



震災救護部の旗



神田の青年会館（第一代会館）
左は関東大震災以前の姿。右は大震災で全焼した会館



震災後に建てられたバラック会館
しばらくの間は、ここを拠点として支援活動が展開された



バラックの後に建てられた仮会館

輸送するという支援が可能になったのです。
キリスト教団体との連携
当時の東京YMCAは日頃から様々なキリスト教団体とのつながりがありました。9月14日には「基督教震災救護団」が組織され、事務所は東京YMCA体育館内に置かれました。日曜学校協会、婦人矯風会や東京教役者会などが参加して、5つの部を設けて分担しました。

賀川豊彦と本所基督教産業青年会

震災前の東京北部（現在の江東区や墨田区）には多くの工場があり、多くの労働者がいました。そのため、東京YMCAはこの地域でYMCA運動を展開する必要性を感じ、1919年に江東支部を開設しました。しかし様々な困難があり、これはわずか3年で閉じられます。これが前史となります。こうした中、関東大震災が起これ、神戸新川の

（2面に続く）

貧民窟で既に活動していた賀川豊彦が関東の出来事を知り、神戸市基督教連盟の臨時座長として震災直後の9月5日に東京YMCAを訪れます。そして山本邦之助総主事と出会い、陸軍被服廠跡（現在の墨田区横綱公園）の惨状を目の当たりにします。そこは火災旋風によって約3万8千人の命が奪われた場所。おびただしい数の焼死者と、10日間及び火葬後の高さ3メートルに達する白骨の山を見た賀川は、救護および新社会事業の構想のもと、「本所基督教産業青年会」を設立しました。バラックの建物が建

赤三角

九月。夏の経験を終えた子どもたちが学校に戻る季節。キャンプや家族旅行に行ったり、部活に励んだり、夏期講習に参加したり、「この夏もどんな経験をしてきただろうか」と街を歩く子どもたちを見ると思う時。▼私が学生の頃は、毎年この時期になると、どこか新しい自分になっているような感覚があった。▼私の二人の姪も、大学の夏にYMCAの海外ユースキャンプに参加させてもらった。海外の地を訪ね、同世代の学生たちと交流したことは、かけがえのない経験になったようだ。海外のメンバーたちが目標をもって勉強や活動をしている中、「あなたの夢は何？」と聞かれ、すぐに答えられず恥ずかしかつたという話も印象的だ。まだ知らない広い世界、可能性があることに触れたことは大きな収穫だっただろう。▼これは、大人である私たちにも言えるのかもしれない。経験が多い分、何かにつけて「このようなものだ」と思ってしまうが、新しい世界に心を開いているだろうか？毎日の生活に追われて、目標が曖昧になっていないだろうか？いくつになっても、日々新しくされている自分を感じられる存在でいたい。（会員部運営委員 大橋めぐみ）

1面より

てられたのは、被災した

興望館の敷地内。陸軍被

服廠跡からそう遠くない

所でした。そして半年

後、ここは東京YMCA

から賀川豊彦に無償譲渡

され、その後の社会福祉

法人雲柱社やさまざまな

生活協働組合の設立につ

ながっていくのです。

運転手養成

東京YMCA理事長で
あり、東京市電気局の局
長でもあった長尾半平が
復興の足として車500
台を購入しました。しか
し、運転手がいなかった
ため、その養成を東京Y
MCAが担うこととな
り、約200名の運転手
を養成しました。この車
は親しみを込めて「円太
郎バス」と呼ばれ、東京
都のホームページでも
「関東大震災後の東京の
復興を支えた」と紹介さ
れています。

職業紹介所

この当時、職業紹介は
宗教団体や慈善団体など
の手で進められていたよ
うです。東京YMCAに
も、社会部の事業の一つ
として「無料職業紹介所」
がありました。9月9日
から10月末日までの間
に、2,544人の求職
者に対応したと記録され
ています。これは震災で
職を失った人たちの大き
な支えになったことでし
ょう。その後、この社会
部の活動は「商工慰安会」
「心の悩み相談」「法律

相談」「郵便局電話局従
業員精神講和」などへと
その活動の幅を広げてい
きました。

北米YMCA

同盟からの支援

このような災害支援活
動のために、1925年
12月末までの約2年間で
約280万円（現在の価
値に換算すると約112
億円）の経費がかかって
います。そしてその3分
の2が北米YMCA同盟
からの寄附によって賄わ
れたのです。

当時の北米YMCA同
盟会長は、ジョン・R・
モット博士。博士は、1
896年の初来日以来、
何度も日本を訪れ学生Y
MCAや日本YMCA同
盟の設立にも尽力下さっ
ていましたから、きつと
力強く日本の惨状を訴え
て下さったのでしょう。

YMCAの ネットワーク力 大きな力を

もう一つ私たちが忘れ
てはならないのは、YM
CAに連なる人たちがさ
まざまな方面でさらにネ
ットワークを広げ、力に
なっていて、被災者たちを助
ける大きなうねりが創ら
れていたという事実で
す。関東大震災の支援活
動を通して、ネットワー
ク力こそが、私たちYM
CAの力の源泉であるこ
とが改めて確認できまし
た。そしてその力に限界
はなく、私たちの日々の
活動に根差して培われて
いきます。日頃から、私
たちが誰かと両手をつな
ぎ、より大きな力を生み
出し続けられれば素晴ら
しいと思います。

受け継がれる YMCAの 根本精神を礎に

日本YMCA同盟の
「復興部週報」の第1号
に次のような記述があり
ます。「日本基督教青年
会同盟委員会は大正12年
9月関東における大災害
に際し各基督教青年会が
率先協力して緊急救護の
事業に力を盡（尽）くし
たることは基督教青年会

の根本精神本来の使命と
に鑑みて誠に機宜を得た
るものと認む。」（192
3年12月10日）

こうした精神は現代ま
で脈々と受け継がれ、阪

神淡路大震災以降のさま
ざまな支援現場で生かさ
れています。一方で、現
在のYMCAは特定非営
利活動法人全国災害ボラ
ンティア支援団体ネット
ワーク（略称 JVOA
D）の一員に加わり、よ
り大きなネットワークの
中で様々な災害に対応し
ていくとしています。

台風19号被災地 長野市豊野地区

復興支援活動からつながる今

大災害が多い近年、より有効な支援を行うために、団体間
で協力をしながら、それぞれの特徴や強みを生かして活動す
ることの重要性が高まっています。これからの復興支援活動
を考える上で、他団体との協働が成果に現れたケースとし
て、2019年の台風被災地支援活動を改めて振り返ります。

◆未曾有の被害

2019年10月12日か
ら13日に日本に上陸した
台風19号は、東日本各地
で大雨・暴風による未曾
有の被害をもたらし、今
なお多くの人々の記憶に
残っていることと思いま
す。長野県も、千曲川流
域を中心とした河川の氾
濫と土砂災害などによ
り、多くの民家、商業施
設、学校、高齢者施設な
ど様々な所が被害にあ
いました。



を決めました。

台風から約2週間後
に、第一陣としてスタッ
フ2人で被害の大きかつ
た長野市豊野地区にある
賛育会を目指しました。

（以下・賛育会）も2階
に迫るほど浸水し、施設
再開のために奔走してい
ました。しかし、そのよ
うな状況でも地域を支援
しようとの考えがあり、
東京YMCAはそれを応
援するために長野の支援

を進めました。ところ
が、ある所から一変し、
道の両側に並ぶ店には土
砂が流れ込み、リンゴ畑
には押し流されて来た車
などがそのままの状況が
目に飛び込んでしまし
た。改めて水害、土砂災
害の被害の大きさを認識
し、気持ちを引き締まる
思いがしたのを覚えてい
ます。

社会福祉法人 賛育会

東京帝国大学キリスト教青年会（東大
YMCA）有志により設立された団体。キリ
スト教の趣旨に基づき、医療・保健、高齢
者福祉、保育を柱とする総合的な地域福祉
活動を、東京・長野・静岡で展開している。
YMCAとは、深い人的交流がある。



その後、鉄骨が折れ曲
がり、床下一面に土砂が
流れ込み、家の中の物は

◆スーパバイザーとし ての役割

YMCAとしての支援
は、直接的に何かをする
のではなく、急ぎよボラ
センを手伝うことになっ
た賛育会職員のスーパ
バイザーとしての役割、
社協との仲介役を担うこ
とでした。

賛育会職員は二手に分
かれ、救護班を担当する
看護師がボランティアへ
の用具の貸出し、健康チ
ェック、ケガの初期対応
などを行い、介護福祉士
・調理師が戸別訪問での
ニーズ調査を行いました。
ここでは、遠方の東
京YMCAは応援を長く
源も絶たれ、一夜にして
すべてを失ったリンゴ農
家など、先の見えない不
安や絶望感の中にある被
災者を思いながら、今後
どのように復興し、これ
までの日常を取り戻して
いけるかを考えました。

まずは、災害ボランテ
ィアセンター（以下・ボ
ラセン）の応援を要請さ
れた賛育会に向かい情報
収集をしつつも、具体的
な内容はまだ伝わってき
ていなかったため、長野
県社会福祉協議会（以下
・社協）を訪問して現況
と今後の具体的な支援活
動を確認し、翌日から支
援活動が始まりました。

まずは、災害ボランテ
ィアセンター（以下・ボ
ラセン）の応援を要請さ
れた賛育会に向かい情報
収集をしつつも、具体的
な内容はまだ伝わってき
ていなかったため、長野
県社会福祉協議会（以下
・社協）を訪問して現況
と今後の具体的な支援活
動を確認し、翌日から支
援活動が始まりました。

まずは、災害ボランテ
ィアセンター（以下・ボ
ラセン）の応援を要請さ
れた賛育会に向かい情報
収集をしつつも、具体的
な内容はまだ伝わってき
ていなかったため、長野
県社会福祉協議会（以下
・社協）を訪問して現況
と今後の具体的な支援活
動を確認し、翌日から支
援活動が始まりました。

まずは、災害ボランテ
ィアセンター（以下・ボ
ラセン）の応援を要請さ
れた賛育会に向かい情報
収集をしつつも、具体的
な内容はまだ伝わってき
ていなかったため、長野
県社会福祉協議会（以下
・社協）を訪問して現況
と今後の具体的な支援活
動を確認し、翌日から支
援活動が始まりました。

まずは、災害ボランテ
ィアセンター（以下・ボ
ラセン）の応援を要請さ
れた賛育会に向かい情報
収集をしつつも、具体的
な内容はまだ伝わってき
ていなかったため、長野
県社会福祉協議会（以下
・社協）を訪問して現況
と今後の具体的な支援活
動を確認し、翌日から支
援活動が始まりました。

◆コミュニケーションを強め る

災害からの復興、日常
生活を取り戻すには長い
時間が必要です。私たち
は、ずっと関わり続ける
ことはできないからこ
そ、地域の中で支え合っ
ていく関係作りが大切で
あると改めて認識しまし
た。そうすることで、被
災後の「新たな日常」も
含めた日常生活を取り戻
し、そこで暮らす人々の
コミュニケーションを強めて
いくこともなると感じ
ました。被災当初は絶望
感、見通しの立たないこ
とへのいら立ちや不安が
大きく、自分のことだけ
で精一杯になり、孤立も
おこります。そこから前
を向くには、行政はもち
ろん、企業や団体が隙間
とだと感じます。

賛育会職員は、普段は
病院や高齢者施設で働い
ているため、相手を受け
入れたら、人の話を聞い
たりする業務が多く、こ
のような時には日常業務
で身につけたスキルが大
変役立ちます。賛育会職
員による聞き取り調査
は、医療や福祉の分野で
地域に根差してきた団体
だからこそ力を発揮でき
る活動で、被災者にとつ
ては、より身近で安心し
て対話ができる存在でし
た。職員にとっても、被
災者とのつながりを実感
できることは、より前向
きに活動を進める力にな
っていたと思います。

少しづつ慣れてきた頃
に、賛育会職員の中のま
とめ役と社協担当者が直
接語る場を設けるなど、
YMCAが担ってきた役
割を徐々に引き継ぐよう
にしたことで、職員がよ
り積極的に活動するよう
になりました。このこと
は、後の「まちの縁側ぬ
くぬく亭」立ち上げにつ
ながったと思います。ぬ
くぬく亭」は、賛育会の
ある豊野地域の団体が協
力して作った、地元の人
たちが気軽に集うことが
できるコミュニティの
場です。開設からしばら
くの間、賛育会職員が中
心となって運営し、つな
がりの拠点としての役割
を果たしてきました。

台風被災直後の様子



被災直後の長沼体育館



オープン時の「まちの縁側ぬくぬく亭」



家屋が壊れ、りんごの木がなぎ倒された
台風直後の様子

2023年7月時点の様子



現在の長沼体育館



3回移転し、現在は豊野町役場1階にある
「まちの縁側ぬくぬく亭」



いまだ工事中の千曲川決壊場所

第10回平和展

「沖縄戦記録写真」パネル展 平和を願って開催

東陽町地域活動コーディネーター 沖 利柯

8月1日～9日、今年も東陽町コミュニティセンターで平和展が開かれました。戦争は決して過去のものではなく、現在も戦禍の中で多くのいのちが奪われています。この平和展に込める思いを、地域活動コーディネーターに聞きました。



この平和展に毎年訪れる人もいる



訪れた人が感想や平和への祈りをノートに記す

8月6日の原爆記念日。市内の路面電車もそは、広島に生まれ育ったの場止まり、市民が心を一つにして平和への祈りを捧げる。そんな光景が普通のこととして育つ。その日に向けて意識が研ぎ澄まされていきました。毎年8月6日には、多くの市民が広島平和記念公園に集い、原爆投下時刻8時15分に平和を祈念して黙祷を捧げます。荘厳な音楽と焼けるような陽射しに包まれていくのだらうかと感

で、6月23日は何の日か分かりますか？と尋ねられましたが、私はその問いに答えることができませんでした。この日は沖縄戦が終結した日、沖縄県では慰霊の日と制定されています。た。広島原爆記念日を知らない人がいることを知りました。私たちが知らないことを知ることが始ま

ばいけないという思いを新たにしました。いのちの大切さを訴え、平和の大切さを少しでも伝えていきたいと始めた平和展が、観ていただいた人にとって少しでもそのきっかけになることを願って、今後もこの活動を続けていきたいと思っています。

東雲児童館 楽しく学ぶ「防災キャンプ」を実施

東雲児童館では7月22日～23日、小学4年生以上を対象とした「防災キャンプ」を実施しました。これは、防災・減災について学んだり体験したりすることを目的に、江東区全児童館が実施することになった宿泊体験事業です。日頃から東雲児童館に遊びに来ている7名が参加しました。

まず、開所式で、いつもはドッジボールや卓球などで体を動かしている集会室を避難所と見立て寝食をすること、電気が通らない想定で進めることを確認しました。続いて、地図を用いて東雲エリアの避難所や危険な箇所を探し、災害に限らず何か困った時にはどうしたら良いかを話し合いました。夕食は、卓上コンロで沸かしたお湯で作った非常食。「意外とおいしいね」「普段でも食べられるね」と好評でした。

夜は、小さなライトのみの薄暗い集会室で過ごしました。参加動機を「誰もいない児童館で遊びたい」「夜の児童館で何かしたい」と話していたメンバーは、未知の世界に大喜びでした。

寝具は、集会室のマットと持参したタオルケット。「寝づらい」「硬い」「災害があった時はこんな感じに寝るんだね」という感想が出ました。

翌日は、深川消防署の消防士による「消火訓練」と「消防ポンプ車の見学」の他、火災現場で実際に着ている防火服の紹介と着用、消防車の試乗もできました。24時間体制の消防士は、就寝中でも要請後1分で出動できるように防火服の着用訓練もしているそうで、その1分着用訓練を披露してもらいました。見事1分で着替え終わると、メンバーからは歓声が上がりました。

「キャンプすごく楽しかった」「また来年も参加する！」との声があがり、楽しみながら防災・減災意識の大切さを知るキャンプとなりました。

(東雲児童館AD 出沼一弥)



消火訓練を行うメンバー



東京YMCA総事務
菅谷 淳

総主事カフェ。大学生だった頃、電車やバスで高齢者に席を譲る、譲らないという話を牧師としました。私が「黙ってサッと席を譲るのが一番良い」と言う

の固さと独りよがりな考え方にハッと気がつき、それ以来、何かを判断する時はいろいろな角度から検証するようになりまし。大多数が賛成していることでも「それは本当か？」と一歩引いて考えることが重要だと気づかれました。

2001年9月11日、アメリカで同時多発テロ事件が起きました。その3日後、大統領に武力行使の全権限を与え、決議が採択されました。大統領の一声で戦争を始めることができるようになったので、それを決議した議会で、

420の賛成票に対し、たった1票の反対票を投じたバーバラ・リーという黒人の女性議員がいました。テロ直後のアメリカでは街中の至る所に星条旗があふれ、報復一色に染まっていた。報復に反対したら非国民と言われ、命さえも危険になるような状況にも関わらず、バーバラ・リーはあえて反対票を投じました。彼女は、投票前に合衆国憲法を何度も読み返しました。そして、議員は国が間違った方向に進まないように努力する義務があることを確認しました。賛成票を投じることは戦争が簡単に始まりさらなる犠牲者を出すことと判断し、彼女は命の危険も顧みず反対票

香港YMCAの高校生を受け入れ

にほんご学院と国際ホテル専門学校で体験授業

7月22日～27日、日本文化に触れながら卒業後の進路選択に有益な情報を得るため、香港YMCAの20人（高校生18人、スタッフ2人）が来日しました。期間中は、東京YMCAのにほんご学院と国際ホテル専門学校で体験授業を受けた他にも様々な場所を訪れ、将来への糧としました。

東京YMCAにほんご学院の体験授業では、前半は「～が好きです」などの初歩的な日本語を学び、後半は午後に体験する茶道の「ごきげんよう」「お先にいただきます」などを習いました。サポート役として参加した在学学生が中国語で解説してくれたこともあり、習った言葉をすぐに習得していました。国際ホテル専門学校では、ホテル業界全般に関する説明を受け、配膳用スプーンとフォークによるサービスの練習をしました。レシピの中から好きなノンアルコールカクテルを作るソムリエ体験では、いろいろな組み合わせを試し、大いに盛り上がりました。

また、早稲田大学では大学説明会に参加し、かえつ有明高校では高校生と調理実習やゲームなどで交流を図りました。国は違っても同年代の共通点がたくさんあり、情報や連絡先を交換して楽しく有意義な時間を過ごしました。

その他、浅草での江戸切子体験、浅草寺見学、渋谷やお台場でのショッピング、東京染ものがたり博物館での染物体験など、日本文化に親しむ機会を持ちました。特に渋谷に行くことを楽しみにしていた人が多く、計算機で金額を確認しながら、アニメ商品や化粧品などを購入する姿が見られました。

青少年が異国の文化や人々と実際に接することは、知見を広め、グローバルな視野へとつながります。コロナ禍では海外のYMCAとの交流がオンラインに限られていましたが、ようやく互いに行き来できるようになりましたので、YMCAのホスピタリティを発揮し、今後も有意義な国際交流の機会を作っていきたいと思います。

(広報室)



にほんご学院での和やかな授業風景



国際ホテル専門学校でのソムリエ体験